

# ベイトソンのストカスティック・プロセスと活動理論の介入研究

—— 拡張的学習サイクルの「先鋒プロジェクト」に着目して ——

Bateson's Stochastic Process and Interventionist Research in Activity Theory  
– Focusing on the “Spearhead Project” on the Expansive Learning Cycle –

児童学科 吉澤 一弥  
Dept. of Child Studies Kazuya Yoshizawa

**抄 録** 2024年9月7日～8日に日本女子大学で開催された第12回活動理論学会研究大会で、筆者は基調講演『ベイトソンのストカスティック・プロセスと活動理論の介入研究』を行った。本稿はそれに加筆修正したものである。ベイトソンのダブルバインドの概念が「抽象から具体への上向」原理における胚細胞の生成メカニズムに反映されていることに触れた後、ベイトソンのストカスティック・プロセス（散乱選択系）のアイデアを、胚細胞モデルを具体化し、実装する段階の突破口となる先鋒プロジェクトの意義との関連で考察した。ストカスティックの原義である「的に向かって弓を放つ」は、最近接発達領域を指し示す4象限モデルの矢印になぞらえることができる。生成された「いまだここにはない」新しいものが存続するためには、ランダムな要素として二重刺激の素材となる人工物や先鋒プロジェクトが、豊富にありかつ多様であることが必要であると結論づけた。

**キーワード**：ストカスティック・プロセス、活動理論の介入研究、先鋒プロジェクト、4象限モデル、最近接発達領域

**Abstract** At the 12th Activity Theory Conference held at Japan Women's University from September 7 to 8, 2024, I delivered a keynote lecture titled “Bateson's Stochastic Process and Intervention Research in Activity Theory.” This paper is an augmented and revised version of that lecture. After discussing how Bateson's concept of the double bind is reflected in the germ cell generation mechanism within the principle of “ascending from the abstract to the concrete,” I examined the idea of Bateson's stochastic process (random-selection system) in relation to the significance of spearhead projects as a breakthrough in the stage of concretizing and implementing germ cell models. The original meaning of stochastic, “shooting an arrow at a target,” can be likened to the arrows in the four-fields model indicating ZPD. I concluded that for the newly generated “not yet here” entities to persist, it is necessary to have a rich and diverse array of artifacts as double stimulation materials and spearhead projects.

**Keywords**: Stochastic Process, Interventionist Research in Activity Theory, Spearhead Projects, Four-Fields Model, Zone of Proximal Development

## I はじめに

2024年9月7日～8日に日本女子大学で開催された第12回活動理論学会研究大会で、筆者が行った基調講演『ベイトソンのストカスティック・プロセスと活動理論の介入研究』を加筆修正したものであ

る。研究の途中経過を記し、今後の方向性を見出すための研究ノートとして執筆した。

まず問題意識について述べる。筆者はこれまでストップ虐待<sup>1)</sup>やウィリアムズの活動といった多職種協働によるプロジェクトにかかわってきた。そこでは、支援ツールやプログラムの創出プロセスを、

胚細胞 (germ cell) の発見とそのモデル化として捉え、そのモデルの実践的検証と改良のプロセスを可視化することを試みた。最近、ウィリアムズの活動について胚細胞研究としてまとめる機会があり、いくつかの胚細胞モデルやその候補を紹介した<sup>2)</sup>。これらの研究の過程で、胚細胞モデルを実際の支援ツールに変換するメカニズムの重要性を認識した。

胚細胞モデルを生成する過程は、「抽象から具体への上向 (ascending from the abstract to the concrete)」の原理における抽象化部分であり、グレゴリー・ベイトソンのダブルバインド理論<sup>3)</sup>が出発点になっている。筆者はベイトソンの研究を読み進める中で、「抽象から具体への上向」の原理における具体化部分の突破口としての「先端プロジェクト」の精査と理解に役立ちそうなアイデアとして、ストカスティック・プロセスのアイデア<sup>4)</sup>に辿り着いた。

## Ⅱ なぜベイトソンなのか

エンゲストロームは、ベイトソンの思考法の拡張性を見抜き、高く評価している。彼は、ベイトソンが独創性に富んだ真のパイオニアであるとし、その理由として、①学習のレベルの考え方が、観察や分類に基づくものではなく、進化的・歴史的な分析に基づいていること、②状況の変革の道徳的主張をするのではなく、学習Ⅲを生成する学習Ⅱにおける内的矛盾を探ったことを挙げた<sup>5)</sup>。

彼はまた、ベイトソンの代表的な論文『統合失調症の理論化へ向けて』について、次のように論評している<sup>6)</sup>。統合失調症という対象について、パートランド・ラッセルのロジカルタイプ (logical typing) の理論をスプリングボードとして、そのコミュニケーションの特徴からダブルバインドという胚細胞的なカテゴリーを抽出した。データとしての信憑性は、ただちに心をつかむ発見力とその視野にある。さらにダブルバインド理論の治療への応用可能性を追求していった。サイコセラピーの場において、ダブルバインド状況が継続的に生じていること、またセラピストが戦略的または直観的に治療的ダブルバインドを用いることを観察した。そして、一部のセラピストの天才的なひらめきを、誰もがそれを行えるように体系づけることを目指した。彼は、こういった思想の中に、ベイトソンの拡張性を感じ取ったと推測される。

エンゲストロームは、拡張的学習の理論的ルーツとして、6人の研究者の名前を挙げているが、ベイトソンだけがアメリカで活動したイギリス人である。他の5人、レフ・ヴィゴツキー、ワシリー・レオンチェフ、ワシリー・ダヴィドフ、エヴァルド・イリエンコフ、ミハイル・バフチンは旧ソビエト連邦の面々であることから、ベイトソンへの注目の特異性がうかがえる。

彼は、ベイトソンの学習Ⅱにおける内的矛盾の解決としての学習Ⅲへの移行の考え方は、拡張的学習と基本的に変わらないと述べた<sup>7)</sup>。その上で、個人による学習Ⅲの試みが稀にしか起こらず、危険を伴うというベイトソンの指摘に対して、対話的で漸進的な集団の試みによってその限界を克服できると主張した。つまり、学習Ⅲの活動理論的な再定義を行ったのである。

筆者が本稿で、ベイトソンのストカスティック・プロセスというアイデアを活動理論の介入研究に導入する意図もそこにある。ベイトソンの思考法からしてダブルバインド以外の概念もヒューリスティックであると想像できるからである。

## Ⅲ ストカスティック・プロセスとは

ストカスティック (stochastic) という言葉の語源はギリシャ語であり、「的をめがけて弓を射る」という意味をもつ。ランダムに起こった出来事の中から一部が選択されて存続する原理を示し、散乱・選択系とも訳される<sup>8)</sup>。

ベイトソンは、遺伝子レベルでの変化と学習の変化の両方がストカスティックな進行過程であると考え、「乱雑さのないところに新たなものは生じない」と明確に述べた。生物学的進化においては、ランダムに突然変異や遺伝子のシャフリングが生じることを意味する。一方、学習においても、広範な代替可能性が生み出され、強化のような機構が働き、選択肢が決定され则认为した。的の中心付近に多くの矢が集まるイメージである (図1)。

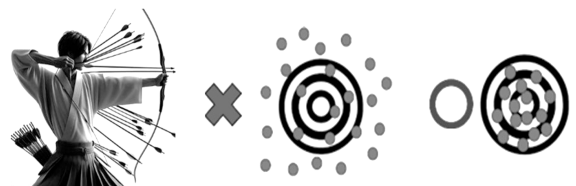


図1 的の中心付近に矢が集まるイメージ

## IV 拡張的学習への応用

拡張的学習におけるランダムとは何か？ チェンジラボラトリー（Change Laboratory：以下 CL と表記する）では、研究者であるか実践者であるかを問わず、メンバーから様々なレベルの介入が飛び交う。それらの介入は、形成的介入と線形的介入が混在する。「的をめがけて弓を射る」というメタファーは、ひとつには形成的介入（formative interventions）を指すと考える。というのは、ランダムな要素とは、弓道の名人が鍛錬を重ね精神を集中しての狙うように、形成的介入において研究者がミラー（状況の問題点を映し出す資料）とレンズ（問題を整理し対話を発展させるヒューリスティックなツール：三角形モデル、拡張的学習サイクルの 7 段階モデル、4 象限モデルなど）を入念に準備するからである。

また、胚細胞モデルを具体化する先鋒プロジェクト（spearhead project）は、「抽象から具体への上向」の具体化プロセスを進展させ、対象を変革する鍵となることから、「的をめがけて弓を射る」というモチーフのランダムな要素に相当するといえる。spearhead という語自体が、槍（spear）の先端（head）から成り、言うまでもなく攻撃や突進の際に最も重要な部分を意味する。先鋒プロジェクトの基になる胚細胞は、単純な未分化な状態の関係性モデルである。ちなみに、ベイトソンはモデルの役割の 3 つの要素を挙げた。①モデル化される対象内部の諸関係を、モデル内部の諸関係と比較検討できる体系だった正確な言語を提供する、②関係を語るボキャブラリーを持ったときに問いを生む役割を果たす、③モデルはアブダクションの概念ツールとして異なる分野の現象から共通項を引き出す<sup>9)</sup>。つまり、ミラーで映し出される元の状況、胚細胞、先鋒プロジェクトという一連の変換に不変の関係性（相同ともいう）を見比べることができる。

ランダムな要素（的の中心付近に集まる多様な選択肢としての矢）が生じる可能性をイメージするには、CL に参加する研究者のメンバー構成の違いを考えるとわかりやすい。例えば、「椅子から立ち上がる」の胚細胞で有名な高齢者の在宅ケアの介入研究の CL のメンバーに、もしエンゲストロームが参加していなかったら、異なる展開や異なる胚細胞モデルが生じたと想像できる。形成的介入にもばらつきやランダムさが生じ、バリエーションが生まれる。

野生の概念形成においても、二重刺激の原理でいえば、補助的なアーチファクト（第二の刺激）がバリエーション豊かに用意されることがランダムの主旨である。また、同じアーチファクトでも文脈次第で意味が変わることに留意したい。エンゲストロームは、「金槌は、釘のように何が叩かれるべきかを教えてくれる（認識論的レベルの最下層）。しかし金槌は労働者の力の象徴として『どこへ？ モデル』（認識論的レベルの最上層）としても用いられる」と述べている<sup>10)</sup>。このように拡張的学習におけるランダム性は、形成的介入（第二の刺激）や先鋒プロジェクトの数の豊富さと多様性に依存するといえよう。

## V ホームレス撲滅の介入研究

### 1. ハウジングファースト

フィンランドのホームレス撲滅の国家戦略におけるサニーノらの介入研究を取り上げる<sup>11), 12), 13)</sup>。文献には、第 4 世代の分析単位の特徴と介入の様子が微細に描かれているので、これらを題材に先鋒プロジェクトの役割や意義について、ストカスティック・プロセスの観点から考察する。

フィンランドは、2008 年から始まったフィンランド版のハウジングファースト（Finland's Housing First：以下 FHF と表記）により、ヨーロッパで唯一ホームレス人口を大幅に減らすことに成功した。この戦略は、無条件に自分のアパートに住むこと（住所を持つこと）が、複雑な問題を克服するための前提であるとして、ホームレスに対して手頃な価格の住宅とカスタマイズされた支援サービスを提供してきた。

このエートスは、支援サービス付きの住宅ユニットで生活を始めることが、それまでの問題や経緯がどれほど複雑であったとしても、「誰もが家賃を支払い、アパートを掃除し、独立した生活に向けたステップを踏むことを学べる」というものである。フィンランドでは、住宅に無条件で住むことが、基本的人権のひとつと考えられている。

サニーノは、住宅ユニットのスタッフの責任者へのインタビューで、FHF で用いられてきた基礎作業が、二重刺激による変革的エージェンシー（transformative agency by double stimulation：TADS）のメカニズムに酷似していることを発見した。この介入は、居住者が「自分で目標を設定し、約束する」

ことを促すものであった。居住者の問題が発生したときに、速やかに居住者を含む関係スタッフ（ケースワーカーや看護師など）が交渉会議をもち、解決策として合意が確立されるまで、粘り強くサポートし続けるというものである。ちなみに、精神医学領域で話題になっているオープンダイアログも、フィンランドのイルヨ・アラネンの創案による。

FHF 戦略が全体的にホームレス人口を激減させたとはいえ、都市部を中心に依存症、借金、メンタルヘルス、犯罪への関与などの多重の問題を抱える若者のホームレスだけは増加していた。このカテゴリーは、従来のサービス網からこぼれ落ちてしまった群で、その理由は頻繁な住居の移動（刑務所や他のアパートへの移動）や、多方面の支援サービスをうまく受けることの難しさによるものである。なお、現在ではハウジングファースト 2.0 に移行している。

## 2. 第4世代のチェンジラボラトリ

サニーノらは3つのCLを、住宅ユニット、市レベルのアクター、州レベルのアクターを対象に実施した。対象となった住宅ユニットは、地域住民から偏見の目を向けられ疎まれながらも、ホームレスの若者に支援付きの住宅を提供している。スタッフは24時間体制で勤務しており、壁で仕切られたオフィスの内側から監視カメラで住民を管理していた。居住者はこれに不満を抱えており、スタッフとの間に緊張状態が続いていた。2018年に開始された住宅ユニットのCLにおいて、これに疑問を抱いたユニットマネージャーは、スタッフと居住者の間の物理的な壁を取り除くことを提案し、実行に移した。壁をなくすことで、スタッフに住民への恐怖感の増大や、反対や病欠などの混乱が生じた。しかし辛抱強い交渉を経て、ユニットマネージャーが居住者とオープンスペースでお茶を飲みながら交流する行動を示したことがきっかけになり、混乱を乗り越える方向に進むことができた。

居住ユニットのスタッフである参加者は、CLのセッションで与えられた空の4象限モデル（four-field model）を豊かに埋めていった。縦軸と横軸を設定し、最近接発達領域を示す右上の象限にいくつもの矢印を描いた（図2）。

横軸は、左側に「管理者」、右側に「コーチ」と「仲間の旅人」が書かれた。「管理者」から「コーチ」への移行は、スタッフが居住者に対して、権威

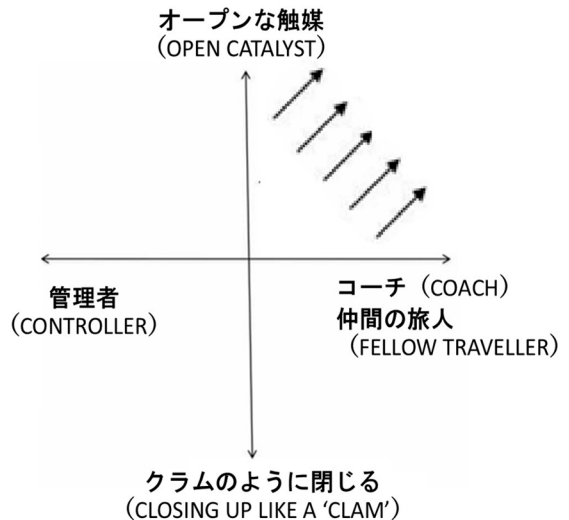


図2 ユニットの变化の方向を示すチャートにおける4象限 [Sannino (2022) のfig.8を引用し翻訳改変した]

的な管理者から支援的な指導者への移行を意味する。管理者が一方向的に指示を出すのに対し、コーチは他者の成長を支援し、双方向的なコミュニケーションを重視する。「管理者」から「仲間の旅人」への変化は、対等な協力者への移行を意味し、共に学び、共に成長することを目指す。

縦軸は下部に「クラム（二枚貝）のように閉じる」、上部に「オープンな触媒」が書かれた。「クラムのように閉じる」から「オープンな触媒」への移行は、居住ユニット内の閉鎖的な状態から、外側の地域社会での交流への移行を意味する。これは、個人や組織が内向きから外向きへと変化し、より広く社会との関係を築くプロセスである。メンバーの関係性の変革、カプセル化された状態から社会化された協働への方向性の変革というこの2軸は、対立軸としていずれも応用可能な普遍性をもつものである。

CLのその後のセッションでは、モデルの具体化と実装準備の作業が中心となり、15の先鋒プロジェクトには、それぞれ名前が付けられ、責任者が割り当てられ、行動計画と文書化計画が策定された。15の中には、スタッフと居住者合同のサッカーチームの結成と地域のチームとの試合、バンドの結成とギグの開催、地域の人々に開放したコミュニティキッチン建設、そしてレジデンスの共用エリアにおける医療専門職のサービス提供などが挙げられた。

外部の人々にも開放されたコミュニティキッチンの建設では、2人の従業員のサポートを受けながら、7人の居住者が同時に働くことになった。居住者は買い物から食事後の清掃まで、すべての段階に参加した。計画には残り物のリサイクルも含まれ、例えば残ったオートミールを使ってパンを作った。原材料は主に通常の寄付から調達されるが、地元の商店主との交渉も行われることになった。このように、コミュニティキッチンの建設では、定義された最近接発達領域の実現に向けた先鋒性が顕著である。スタッフと居住者の間に信頼関係が築かれ、協力しながら学び合う環境が整っていった。また、地元の商店主との交渉を通じて地域との連携が深まった。

もうひとつの医療専門職による居住ユニットの共用エリアでのサービス提供は、定義された最近接発達領域へ向かう前段階と捉えられる。一部の医療専門家が居住者のアパート内に入ることを躊躇するため、共用エリアでサービスを提供することは信頼関係を築く第一歩となる。居住者にとっても居住ユニット内の共有エリアでサービスを受ける体験は、地域社会と交流を始めるステップとなりうる。

### 3. 第4世代の介入研究の特質と散乱選択系

この居住ユニットのCLでの新しい働き方を学ぶモデルは、同様の変革を目指す各地の居住ユニットに影響を与えた。これは、第4世代に特徴的なクロスセクターの例である。また、翌年の2019年に始まった市のCLと、州のCLに連動させたのである。住宅ユニット（地上レベル）のメンバーが、市（中間レベル）のCLに参加し経験を共有し、そのビデオクリップを持った両レベルのメンバーが、今度は州（国レベル）のCLに加わった。成果であるビデオクリップや文書などの資料が持ち込まれ、州のCLでの分析と設計の刺激として使用された。これは、第4世代のもう一つの特徴であるクロスレベルの例である。

第4世代の介入研究の対象は、ホームレス撲滅の介入研究に代表されるように、重大な社会的危機に対する挑戦である。環境破壊の問題、貧困と経済格差、パンデミックといった第4世代の対象は、第3世代までのような活動システムの明確な輪郭をもたない。そこでは、マルチレベルでの分野横断的な解決策を必要とする。分析単位は異質な連合（heterogeneous coalition）における連合的な拡張的

学習サイクルとなる。政府から草の根の運動、国境を越えた組織など、雑多なレベルで異なる価値観などが水平にも垂直にも混在し、中心は存在せず緩くつながるのも特徴である。サニーノらの介入研究が示すように、クロスセクターおよびクロスレベルの複数のCLを連結させる方法論は、異質で散乱したランダムな要素を、選択し統合しようとする試みであり、ストカスティック・プロセスの本質に通じる。

## VI 先鋒概念の文献的検討

### 1. 形成的介入の先鋒性

近年注目を集めている先鋒概念が、活動理論においてどのように定義され用いられてきたかを、文献研究を通して検討する。エンゲストロームは、拡張的道具の議論において、ミクロコスモスが活動システムの文化的に進んだ未来形態の社会的テストベンチであり、先鋒であると述べている。また、拡張的研究の一環として意識的に形成されるミクロコスモスは、活動システム内部で省察的なコミュニケーションを育み、それを外部に広めながら拡大し、最終的には活動全体のコミュニティに溶け込むことを目指していると説明している<sup>14)</sup>。

また彼は、第4世代の形成的介入について、それはすでに現場で展開されており、この既存のエネルギーを基盤に、より広範な変化プロセスに組み込む必要があると述べる。そして、広範な分野において適切なアクターに焦点を当てる戦略が重要であり、それが次の最近接発達領域への重要なステップとなり、大きな変革プロセスにつながるとした<sup>15)</sup>。つまり、形成的介入は、より広範な変化を引き起こすための一般的な文脈での先鋒を意味する。先鋒は変化を先導する重要な役割を持ち、変化をリードし、次の段階への橋渡しの存在であり、変革の最前線に立ち、進化や発展を推進する力の表現と考えられる。

### 2. フィンランドの裁判改革における変革の先鋒

ヴァウラ・ハーヴィストは、フィンランドの裁判改革に関する介入研究を行った<sup>16)</sup>。ヴァンター裁判所での試行を通じて、拡張的学習の可能性を追跡し、裁判官による漸進的な革新、すなわち変革の先鋒を特定した。これには、弁護士や依頼人が積極的にイニシアチブを取る裁判や、裁判官が和解を促進する手続きが含まれる。これらの先鋒により、新しい話し方が生まれ、同時に新たな緊張も生じた。例

えば、依頼人のイニシアチブの増加と裁判官の管理強化との間の緊張や、法的専門家の公式な話し方と依頼人の非公式な話し方との間の緊張などである。

先鋒概念について、エンゲストロームが広範な変革全体をリードする存在として、ミクロコスモスや形成的介入の一般的特性として語っているのに対して、ハーヴィストは裁判改革という局所的な文脈で先鋒概念を用いており、変革を推進する具体的な行動やイニシアチブに関係づけていることがわかる。

### 3. ホームレス撲滅と先鋒プロジェクト

サニーノとエンゲストロームによるホームレス撲滅のための介入研究では、先鋒という用語が頻出し、キーワードのひとつとなっている。上述したように、居住ユニットのスタッフである CL の参加者は、4象限モデルの右上の象限にいくつもの矢印を描き、介入研究者の依頼に沿って 15 の先鋒プロジェクトを創出し、直ちに実装に取り掛かった。この最近接発達領域の旅を加速させることを促すアクティブな介入は、形成的介入を信条とする活動理論にとって例外的な線形的介入といえるかもしれない。

### 4. 野生の概念形成における 4 象限モデル

4 象限モデルは、エンゲストロームが提唱した野生の概念形成 (concept formation in the wild) の説明図としても用いられている<sup>17)</sup>。文化的に新しい概

念は、実験室の研究者だけではなく、日常生活の中の実践者によっても創造される。野生の概念形成における論証的文法 (argumentative grammar) として 5 つの主導的指針が、右上の象限に矢印で、つまり先鋒として描かれている (図 3)。

5 つの論証的文法は次の通りである。①野生の中での概念形成は、歴史的に進化する集団活動システム (collective activity systems) の中で行われる。②概念には質的に異なるタイプが存在する。③理論的概念は、抽象から具体への上向の原理によって形成される。④野生の中で形成された概念は、本質的に多義的 (polyvalent) であり、議論され、動的であるものである。⑤野生の中での概念形成は、二重刺激による変革的エージェンシーの生成と絡み合っている。

横軸は、左側に「実験室と教室 (における概念形成)」, 右側に「野生 (における概念形成)」が配置されている。「実験室と教室」は、実験室の研究者や教室の教師が、制御された条件下で特定の目的や方法に従って進める概念形成の場であり、カプセル化された領域といえる。一方「野生」は、日常生活の中で様々な背景や経験を持つ人々が、持続的な問題や課題に取り組む中で自然に進める概念形成の場であり、予測不可能で広大な領域といえる。したがって、横軸は、質的に異なる多様なポリフォニーの集積する場への移行を意味する。

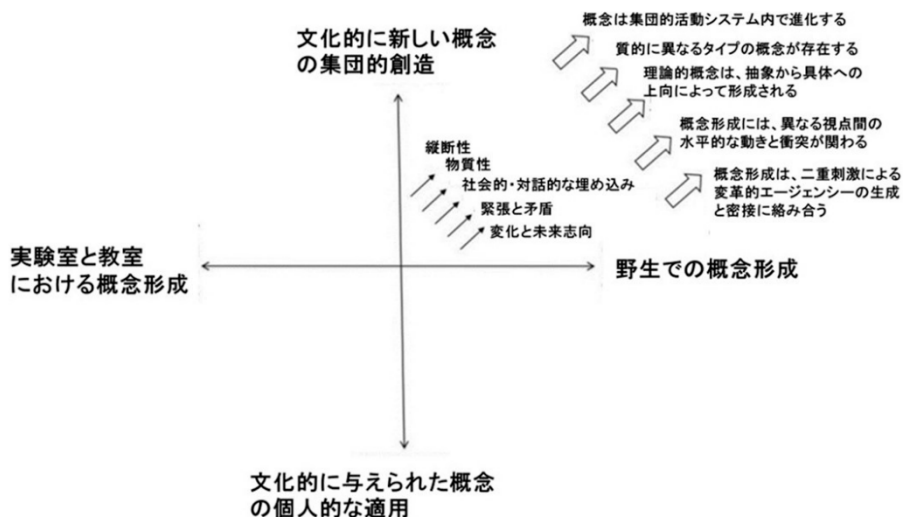


図3 野生での概念形成研究のための指導的アイデア [Engeström (2020)から引用し翻訳した]

縦軸は、下部に「文化的に与えられた概念の個人的な適用」、上部に「文化的に新しい概念の集団的創造」が置かれている。「文化的に与えられた概念の個人的な適用」は、与えられたものを適用する保守的な態勢であり、かつ個人レベルの概念への関わり方である。一方、「文化的に新しい概念の集団的創造」は、新しい概念を創り出す革新的な態勢であり、集団レベルでの概念の創造である。したがって、縦軸は、現状維持的な再生産から、習慣や前提を超える生成へという保守から革新への価値観の移行を意味し、いずれの軸も応用可能な普遍性をもつと考えられる。

## VII まとめ

ベイトソンのストカスティック・プロセスとは、ランダムな要素の流れから選択機構が働いてごく一部が存続するという進化や学習を説明する原理である。活動理論における拡張的学習サイクルの進展、とくに「抽象から具体への上向」における具体化プロセスの突破口としての先鋒（spearhead）概念と、ストカスティックの原義である「的をめがけて弓を射る」のメタファーとの共通性に注目した。

的とは、活動理論において何を意味するのであろうか。これまで示してきたように、4 象限モデルの右上に描かれる「矢印」が指し示す最近接発達領域であると考えられる。活動理論では、「いまだここにはない」新たなものや事を生み出すことが挑戦の眼目であることから、抽象化して言うと、的とは対象（object）のことであるともいえよう。対象は、活動システムに持続的な方向性、目的、アイデンティティを与えるもので、三角形モデルにおける中心的で重要な要素である。対象は固定されたものではなく、文脈によって変化し、ぼけたり、消失したり、集団主体によって再構築される。

的の中心近くに集まるランダムな要素は、形成的介入において第二の刺激となりうる素材としての補助的道具、そして先鋒プロジェクトを意味する。二重刺激の原理を作用させ、先鋒の可能性を担保するためには、ランダムな要素の十分な数と豊かな多様性が不可欠である。ランダムな要素の豊富さは、学習の進化のプロセス、つまり対象の変革を生み出す（同時に主体の変革もセットで生じる）ための必要条件であり、変革的エージェンシーを生み出す二重刺激の活性化の前提となると筆者は考えている。こ

れは実践的な指針であり、拡張をめざすすべての活動に当てはまるのではないだろうか。

ストカスティック・プロセスの選択機構を念頭に置くと、ランダムな要素として表現される「いまだここにはない」新しいものが、いかに進化しながら存続できるか、それとも消滅してしまうかが課題となる。ベイトソンのいう「存続」という用語は、単に定常状態として持続するのではなく、ロジカルタイプを踏み上げる不断の進化を意味している。

この存続問題についてサニーノは、変化や発展の定着を確認するためには一定の時間が必要であることを指摘した。2006 年に始まった高齢者の在宅ケアに関する介入研究の長期フォローアップとして、「椅子から立ち上がる」という胚細胞をモデル化した「モビリティ協定」が、10 年後にヘルシンキ市の約 7,000 人の高齢者のサービスに提供されている事実を挙げた<sup>18)</sup>。

ベイトソンは、ストカスティック・プロセスの議論の中で、ランダムに選ばれた新しいものが存続する上で多くの困難が伴うことを指摘している。その理由は、生態系のシステムが自己修復的であり、逸脱を除去する動きが強く、保守的であるからである。拡張的学習サイクルにおいて新しいアイデアや変革が受け入れられ、定着するためには、多くの試練を乗り越えなければならない。豊富さと多様性を持つ先端プロジェクトは、既存のシステムから代替システムへの困難な移行を突破する推進役であり、存続させるにはプロジェクトへの CL 後における長期的な関心の保持とパートナーシップの形成が重要である。

## 謝辞

関西大学の山住勝広先生から第 12 回活動理論学会研究大会で基調講演の機会を与えていただき、発表後にも示唆に富んだ貴重なコメントを多数いただきました。これが刺激となり、本稿をまとめる動機になりました。こころより御礼申し上げます。

## 引用文献・参考文献

1. 吉澤一弥、西智子：多職種グループセッションにおける拡張的ダイナミズム―「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」の振り返りから―、日本女子大学家政学部紀要，70，p.1-p.8（2023）

2. 吉澤一弥：ウィリアムズの活動における概念形成のプロセス—胚細胞研究における予備的考察—, (根津知佳子, 和田直人, 安藤朗子, 甲斐聖子, 吉澤一弥: ウィリアムズ症候群の家族を対象とした生涯発達支援プログラムの構築 第V章), 日本女子大学総合研究所紀要, **27**, p.221-p.235 (2025)
3. バイトソン著 佐藤良明訳：精神の生態学へ (中巻), 岩波文庫, p.89-p.137 (2023)
4. バイトソン著 佐藤良明訳：精神と自然, 岩波文庫, p.277-p.350 (2022)
5. エンゲストローム著 山住勝広訳：「拡張による学習 完訳増補版」, 新曜社, p.186 (2020)
6. 前掲書 エンゲストローム／山住勝広 (2020), p.54-p.55
7. エンゲストローム著 山住勝広監訳：「拡張的学習の挑戦と可能性」, 新曜社, p.44 (2018)
8. 前掲書 バイトソン／佐藤良明 (2022), p.419
9. バイトソン著 黒川淳訳：天使のおそれ—聖なるもののエピステモロジー, 青土社, p.73-p.74 (1992)
10. 前掲書 エンゲストローム／山住 (2018), p.96
11. Sannino, A. : “Transformative agency as warping: how collectives accomplish change amidst uncertainty”, *Pedagogy, Culture & Society*, **30** (1), p.9-p.33 (2022)
12. Engeström, Y. and Sannino, A. : “From mediated actions to heterogenous coalitions: four generations of activity-theoretical studies of work and learning”, *Mind, Culture, and Activity*, **28**(1), p.4-p.23 (2021)
13. Engeström, Y. and Sannino, A. : “Discursive manifestations of contradictions in organizational change efforts A methodological framework”, *Journal of Organizational Change Management*, **24** (3), p.368-p.387 (2011)
14. Engeström, Y. : “Learning by Expanding second edition”, Cambridge University Press, p.261 (2015)
15. Yamazumi, K. : An Interview with Annalisa Sannino and Yrjö Engeström on Fourth-Generation Activity Theory, *Actio: An International Journal of Human Activity Theory*, **4**, p.11 (2020)
16. Haavisto, V. : Court work in transition: An activity-theoretical study of changing work practices in a Finnish district court. doctoral dissertation (University of Helsinki), p.288(2002)
17. Engeström, Y. : “Concept formation in the wild: towards a research agenda”, *Éducation et didactique*, **14-2**, p.99-p.113(2020)
18. 前掲書 Yamazumi (2020), p.14